

月報合本

70

日本文学全集



月
報
合
本

日本文学全集 70



筑摩書房

日本文学全集 70 月報合本

昭和四十五年十一月一日発行

発行者 竹之内静雄

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二三

本文整版 株式会社精興社
本文印刷 株式会社精興社
製本 株式会社鈴木製本所

現代文学大系

第 1 卷

「国語読本」のことなど

木 村 毅

僕が坪内先生の名前を知ったのは、子供の時からのこと。明治三十三年（一九〇〇）、十九世紀の終った年、尋常小学の二年から三年へ進む時、新しく変った国語読本を貰った。見ると、文学博士坪内雄蔵著と書いてある。親父が「これは大変偉い人が書かれた読本だ」と云う。小学校の国語教育は、国語のみならず、修身も科学も政治も全部教えなくてはならないものであったが、総合的な教養のある人は当時、坪内先生しか居られなかった。文学博士とはいふものの先生は大学では政治科をやったし、早稲田以前には、国際経済、バジヨットの国際政治史などを講義していられたから、国語学者とは異った劃期的な、一般的な教養を与える読本が出来たわけである。

教える先生が非常に面白がって、むちを振りながら教えてくれたのを思い出すが、僕は、読本とはこんなに面白いものなのかと初めて思った。坪内先生の読本では、「桃太郎」の話が出て

月 報 58

昭和 42 年 10 月

目 次

「国語読本」のことなど……………	木 村 毅
潮没と風刺と……………	小田切秀雄
透谷と国津府・小田原……………	平岡敏夫
感傷的な透谷像……………	三好行雄

東京都千代田区
神田小川町2の8

筑 摩 書 房

くると、猿が陣羽織を着ている。それから「虫の音楽」というので「チチロヤチチロ、リンリンリン」と擬音が入ってくる。虫がラッパを吹いたり、ヴァイオリンをひいたりしている挿絵が載っている。それ迄はお伽話の本しかなかったから非常に新鮮だった。勿論、口語体というものにはじめてぶつかったのもその読本である。坪内先生が、口語体はいかん、少くしろという文部省に交渉して、口語体を出来るだけふやし、文章体と交互に出てくるように編集した。親父は、「何だ、文学博士の書いたものなのに、とてもやさしいじゃないか」と云ったが、漢字を消すことは坪内先生の方針だった。しかし、この読本は内容があまりにも進歩的だったので、新潟県と京都府、岡山、鹿児島 の四県しか使わなかった。

僕が早稲田へ入ったのは明治四十四年十七歳の時、当時は試験さえ受かれば入れたので、僕には中学の経験はない。それなのに大学生になってみて、社会のこと予算のこと産業のこと、自分が一通りわきまえているのがわかる——それは、なぜか？考えてみると、あの坪内先生の国語読本のおかげであって、捕鯨、石炭、織物、漆器——日本の産業について精しい教科書だった。子供の時はなぜこんな面白くないものを書いてあるのか



「国語読本」(尋常三年用)

と思ったが、日清戦争の時代で、丁度日本の産業立国の滔々たる時勢を反映していたのである。電話について書かれたのもあの読本が最初で、これは僕が話して電々公社の電話史に記載してある。面白いのは株式会社の歌。小学校の読本に株式会社がでてくるとは、空前絶後のものだろう。

早稲田では希望のシエクスピアの講義を、よろこんで聞いた。しかし出入りはしなかった。そのうち三十過ぎてから「小説研究十六講」という本を書き、先生の所へ送っておいところ、先生はこの本で僕を認めてくれたらしい。

春陽堂から逍遙全集が出ることになり、内容見本の文章を書くことになった。やかましい先生だから、五十嵐力博士やら弟子たちが恐れをなしてよう書かない。困った編集部の方村君に頼まれた僕は、筆者のことは伏せるといふ条件で書いた。夜更けて今村君が僕の戸を叩く、何事かと出てみると、「実は今坪内先生の所からの帰りで、先生が非常にお喜びで、ほめる、誰が書いたのかと問いつめられて木村さんあなたの名前を出した、非常に面目を施したのでお礼に来た」ということだった。その文章は逍遙全集の後記に刊行趣旨として載っている。

先生とのもう一つの交渉はバーナード・ショウ来日の時のこと。改造社員として、当時三絶——原稿執筆、講演、映画や芝居の上演拒否——を公称していたショウを招けとの命を受けて、上海へ飛んだ。戦線を突破して、北京迄行った。勿論ケンもほろろの挨拶だったが、魯迅と孫文未亡人宋慶齡の二人が紹介してくれ、「使命を帯びてきた」という僕の言におどろいたショウは来日を約してくれた。近衛さん、永井柳太郎、荒木陸相、総理大臣斎藤実、東大の斎藤勇らが面会を申込む。そのうちショウが興味を持ったのは近衛、荒木さんの二人。坪内先生も会われると連絡があった。面会の手筈を調べて熱海へゆくと、先生の会いたいというのは丸つきりうそだった。ショウの講義もされたし、本も書いたし翻訳もある、先生がお会いになるのが一番適任だと思ったが、出たかないと云われる。僕は困ってね、憤然として、出されたビールを三本、またたくまに立てつづけにのんで了った。先生は呆氣にとられていました。ショウは早稲田大学だけは行きましたよ。取りまいた学生が「ショウスピートスピーチ」というあの露天、校庭で二十分位演説した。

坪内先生は、小説劇曲評論舞踊に新しい境地を展いた開拓者だということ、これは、周知の事実であるが、日本に於ける、明治大正昭和の国語読本の型を決めたという功績はあまり知られていないと思う。文部省の国定教科書は高野さんが書き、中等教科書は芳賀矢一さんが書いたが、芳賀さんは富山房の編集部にて、坪内読本について先生にいろいろ進言もしているが、編集の一切を見ていた、それを中等篇に応用したといえる。坪内先生が日本の国語教育の根本を決めた始祖であることを力説

しておきたい。(談)

(評論家)

溺没と風刺と

——晩年の二葉亭四迷——

小田切 秀雄

『平凡』には、それまでの二葉亭四迷の仕事のなかにあまり見られなかったところの、深い溺没ということと、主人公へのはげしい風刺ということがある。この『平凡』という最後の中篇にはほかにもいろいろの面があるが、とくに溺没と風刺の二つの面がきわだっているのである。

溺没という古いことばがまったくふさわしいほどに二葉亭がおぼれこんでいる第一の部分は、いうまでもなく「ボチ」という小犬にたいする少年時代の主人公の愛着ぶり、身も世もないほどのこのうちこみ方は、少年も作者もまったく一体となつて純粹無垢のひたむきな愛情の流露と別離の悲しみを表現しているように見える。わたしは中学一年生のときに国語教科書でこの部分を読んで心にきざみこまれてから、その後何回か読み返してそのつど新たな感銘を受けているが、つい最近まで、これは二葉亭自身の少年時代の実際の経験を書いたものだ、と信じこんでいた。ところがこのあいだ読売新聞社の『近代日本の文豪』という本にやや長い二葉亭論を書くことになって、あらためていろいろのものを読んだときに、これが実は二葉亭が中年になってから犬を飼ったときの経験を、子供のときのこと仕立てて書いたものだということがわかり、おどろいた。考え

てみると、そのような事実の指摘には以前にもぶつかったことがあったのに、いつのまにかそれは忘れて、少年時代の二葉亭の経験そのものの表現としてわたしの心のなかにやきついていたのである。

わたしのうかつなことも事実だが、それほど強烈なりアリティをこの部分をもつていて二葉亭のイメージと重なっているということもまた事実である。純粹無垢な愛情の表現のこのなりアリティは、作者がそれに深くうちこんで全面的な流露とその表現とに力を傾けているところからくるのだが、その愛情の対象はほかならぬ愛玩用の小犬というにすぎず、度外れの犬好きの心の生態ということに墮しやすいい性質のものである。それがそうならないのは、現世の人間とのさまざまな愛のさまざまな不純にさんざんに苦しめられた人間が、それへのはげしい絶望と不信からして小犬への利害関係を離れた愛にまったく対照的なものを描きだそうとしたからである。愛を求めてやまぬ人間らしい心の深さ、それがそのつど裏切られての心の傷の深さ、これがこの部分のなりアリティの深さと対応する。こうした内容と表現とを媒介する作者の反撥的な傾情のはげしさが溺没となつて現われる。第一六節のところの、「ああ、想出しても無念でならぬ。何故私はボチを飼けて、人を見たら皆悪魔と思ひ、一生世間を脱め付けて居させなかつたらう？」云々などというところにはそれは実際にも露顯している。

溺没のもう一つの部分は、末尾に近いところでお糸さんの俗曲弾き語りを聞くところ、第五三節である。「シンミリとした何とも言へぬ旨味のある声だ。力を入れると、凜と響く。脱く

と、スウと細く、果は藕くわの糸のやうになつて、此世を離れて暗い無限へ消えて行きさうになる時の儚はかなき便りなさは、聴いてゐる身も一緒に消えて行きさうで、というあたりからである。

ここには「何だか斯う国民の精神とでもいふやうなものが髣髴ふふとして意気な声や微妙な節廻しの上に顯はれて」云々と手放しで、これに打込みほめ上げている二葉亭がいる。ペリンスキーふうの文学論、人間観念を抱いて文学世界に登場し、この『平凡』でも当時の作家の実人生にたいする態度を根本的に批判している二葉亭として、これはいったいどういふことか。俗曲へのこうした溺没は、二葉亭の生い立ちのなかでつちかわれていたものが手放しでここに出てきたのでもあるが、手放しでこれを描くことに力を傾けてゐるのはやはり当時の文学へのきびしい批判的対立からである。

溺没ということと風刺ということとは、それ自体としては対立的な性質のものであるが、右に見たように二葉亭の溺没の根拠となつたもののなかにはもともと風刺の対象たりうる、または、たるべきものがあり、現われ方はちがつてゐるが根拠においてはあい通ずるものがある。この作品での風刺は、主として成人してからの主人公の、恋愛・愛欲の面と作家修業・作家生活の面とに向けられてゐるが、自然主義作家をもふくめて文学への安易な肯定と信頼、それに結びついた実生活上の無責任を鋭くあばいており、文学についてその存在理由を根本から疑つてかかる、ということの必要を主張している。描かれた主人公は実際に作家を廃業して久しいという設定になつてさえている。しかし、この主人公を作家としてごく一通りの、二葉亭だけで

なく当時の主要な作家たちの誰よりも小さなものとして設定したことは、二葉亭自身が語っているように「本来堂々と正面から理窟をやるつもりだつたのが、いざ書いてみるとどうも冷嘲れいこうす様な調子」になつてしまふ結果となつた（『平凡』物語）。しかし自身をもふくめてのこの冷嘲の鋭さと、右のような性質の溺没と、この二つの面が晩年の二葉亭とその『平凡』とをきわだたせていたのである。

（文芸評論家）

透谷と国府津・小田原

平岡敏夫

八月の末、急にまた行きたくなつて国府津・小田原へ出かけた。明治二十六年八月三十日、透谷は国府津在前川村（現在神奈川県足柄下郡橋町前川まへがわ）の長泉寺に転居し、十二月までそこに住んだ。東海道線で下るとき、国府津駅のすぐ手前の山側に赤屋根の寺が二つ目につくが、最初のが長泉寺である。国府津が近づく私の視線はいつも寺に向つてゐるが、寺へも数回行つてゐる。何の新発見があるわけでもない。本堂の右側に洋裁教室ができた時はびっくりしたが、満二十四歳の青年透谷と二十六歳の妻ミナと一年二カ月の長女英子の三人が住んだ四畳の部屋は、本堂内部左側にそのままの形が残つてゐる。ただそれをのぞいたり、あがつて畳の上を歩いたりするだけのことなのだが、今後もまたそれをくり返すだろう。今度はちょうど透谷が引越して来た日に當つていたが、住職が親切に戸をあけて入

れてくれたその部屋のそばで、七十四年前の情景を思い浮かべてみたりした。これはもはや信者のふるまいということになるだろうが、わからぬことがないわけではない。

あまり知られていない資料で、ミナが「彼地では和田理学士と大矢さんが出の外『文学界』の人では島崎さんが一度お出でになつたのを覚えてゐます。」と言っているのが氣にかかる。藤村が汚れた僧衣をまといて現われたことは『春』に書かれていて周知のことだが、大矢正夫（大阪事件関係者）がよく来たらしく、また和田理学士というのが全然わからない。どういふ交友だったのだろうか。ここでの生活は「一夕観」で知られているが、私は「客居偶録」が何度読み返してもよい。

わが来り投ぜしところは、都内を離るゝ事遠からずと雖、又た以て幽栖の情を語るに足るべし。これ唯だ海辺の一漁村、人烟稀にして家少なく、数屋の茅檐、燕来往し、一匹の小犬全里を護る。濤声松林を洩れて襲ひ、海風清砂を渡つて来る。童子の背は澁を引きたる紙の如く黒く、少娘の嬌は、半躰を裸らわして外出するによりて損せず。雄鶏昼鳴いて村叟の眠を覚さず、野雀軒に戯れて兒童の之を追ふものなし。前家に碓春の音を聴き、後屋に捉續の響を聞く。人朴にして笑語高く、食足りて歓樂多し。

「深く人間を学ぶに堪えたり。」として、いざりの会津武士主従を見送った街道は、国道一号線の車群が疾走し、かつての鯉船を迎えて「村中の老弱海浜に鳩まる」ところには、建設中の西湘国道の鉄骨が並んでいるが、小国寡民の桃源郷を夢みていたというだけのものではなく、「希くは名もなく誉めなき村人

の中に交りて、わが『真村』をその幽囚より救はんか。」という意識がここでの透谷にはあったのである。

小田原城が鉄筋コンクリートに再建されて間もないころ、城内の郷土物産等の係の人たち何人かに透谷のことをたずねて見たが、だれひとりその名を知らなかったのも愕然としたことは忘れられない。小田原に住んだ白秋のことはみんな知っていた。歌を染めぬいたのれんなどもそこに売っているのである。ある先輩にそれを言ったら、透谷と白秋では問題にならぬのが当然と言われた。白秋はそんなにエライのか。透谷信者の思いに過ぎぬというだけでは片づけられぬ文学史の問題であろう。透谷・白秋の民衆的基盤の深さ・広さの問題である。しかしまた、純粹な近代的自我一本で透谷像を描こうとして来た文学史家の罪でもありはしないか。私は透谷ほどの民衆の深さに到達していた文学者を知らないと言いたいが、その深さが逆に白秋ほどの民衆的基盤の広さを持ち得なくさせたということになるのだろうか。小田原市立郷土文化館には白秋記念室があるが、ここの透谷展示はいま城内二階に移されているから、透谷を知らぬ人は係員にはいないだろう。ささやかなこの展示からどれだけのものを受けとるかにはわからぬにしても、それだけ郷里で知られて来たことになる。

生まれた唐人町（のち万年四丁目）は今バス停の名のみに残り、万年四丁目は今度行ってみたら浜町一・三丁目、本町一丁目と改正されていた。明治九年一月（透谷七歳）の調査では本籍土族の戸数八百七十七戸、平民千六百二十七戸、人数は土族男二千四百五十二人、女二千五百人、平民四千三百九十七人、

女四千四百十人である。明治十四年、一家は東京に移住するが、この年の調査になる小田原旧町勢一覧には家業別戸数、職業別人口があがっており、新玉町・万年町・幸町・十字町・緑町の五町のうち、他と比べて万年町で目立つものは魚商十七軒、古道具屋十軒、旅籠屋二十四軒等であり、筆墨商は緑町の三軒に比べて一軒もない。職業では漁業百九十七人で圧倒的に多く、医師は三人である。もと藩医の祖父玄快は明治十七年に死んだが、この三人にふくまれているのかどうか。ともあれ、透谷はこのような町で育ったのであり、有名な自伝的書簡（明20・8・18付ミナ宛）等と併せみて、私は私なりの少年透谷を思い描く。帰りに、当時は市外だった谷津の高長寺を訪れてみた。依然として何の標識も出ていないが、透谷の墓標に至る道はタタキに新しく舗装され、墓地内には弟垣穂が継いだ丸山家の墓碑のみが新しく建っている。丸山家がむろんそれを建てたのだらう。北村家のものはない。一子英子（没）は堀越家に嫁して透谷のあとを絶えたが、小田原・国府津から透谷の何を見出し得るか。私をひきつけるものは依然としてあるのだが、伝記研究は今のところはほとんど進められそうにもない。（昭42・9・10）

（東海大学助教）

感傷的な透谷像

三 好 行 雄

最近出た平岡敏夫氏の「北村透谷研究」のあとがきを読むと、

氏の透谷研究の前おきには氏なりの〈崎嶇たる人生の行路〉と〈見事に足をすくわれた「屈辱」の記憶〉があったそうである。また、平岡氏がしばしば言及している小田切秀雄氏にも、学生運動の挫折の体験とかさねて〈数年来わたし自身の歩もうとしてきた道の確かな痛烈な先駆者として〉の透谷を見る眼の発見があった。一般に、広くいえば文学、狭くいえば作家との出会いが、批評主体のなんらかの原体験を踏まえておこなわれるというのは決して珍らしいことではない。透谷の場合、それが屈辱とか挫折とかいった種類の語彙で語られることが多いのも、この白面の批評家にはいかにもふさわしい事態といえよう。

文学研究がいわばその前史として、研究主体と研究対象とのなまぐさい臍の緒を所有するのが果してよいことか、どうか？ 探ってゆけばどういふ気紛れめいた結びつきにも臍の緒があるものだとしたら、わたしの信条からいえば、実は研究とはその臍の緒を無にする作業にはかならないように思える。そこに、文学研究というものの根源的な空しさがあるのかもしれない。が、残念ながら、いまから十八年ほど前、透谷を卒業論文に選んだ私自身の場合にも、どうやら細い臍の緒はあったようである。二、三年前から透谷についてまとめる機会を与えられていながら、その仕事にとりかかるとなればなぜか億劫なのは、その細い糸の消しがたい、いやらしい勁さを予感しているせいかもしれない。

戦後世代とか戦中派とかいうものさしの有効性を信じているわけではないが、現代風にかぞえて十九歳の夏に敗戦を迎えたわたしなどは、どうやら両者の中間的な、不安定な世代に属し

ているらしい。戦中派ほど明確に戦争とたちあつていたのでなく、戦後世代ほどきっぱりと戦争体験と無縁でもない。もっとも直接には学徒労働員令——そんな法律があつたような気がする、とにかく、昭和十九年のわたしは佐世保海軍工廠の熔接工だった——という形で戦争と対面していた私たちにとつて、戦争の真の意味はいわば未来とともに存在していたようである。つまり、未来が確実に閉ざされているという予感とともに。いまはまだ捉えられていない、しかし、いつか確実に戦争の死神に捉えられるだろうという予感、あるいは信念。へ人生二十五歳」という合言葉を、わたしは本氣になつて信じていた。

敗戦後になかば偶然のようにして国文学科に進んだとき、わたしは天折した近代作家の作品にとかく魅せられがちであつた事実と、わたしの戦争体験とはどこかで細くつながつていたような気がする。とにかく、近代文学研究というラチもない領域にふみこんだ機縁は、二十六歳で自裁した透谷の発見だった、といえはすこし大袈裟だが、決して嘘ではない。だから、わたしの思い描く透谷像は、たとえば次のようなものであつた。

未来がすぐそこに在るように見えながら、その未来に痛烈に裏切られた人間。そして時代の裏切りを自己の裏切りだと信じてしまうような人間。

すくなくとも、わたしはそこから出発した。たとえば、こんなふうに。——自由民権運動からみずから離脱したとき、透谷が思想に絶望したのではなく、運動自体の矛盾にみちたプログラム、その内包したマキャベリズムに絶望したのは確かだろう。しかし、もっと確実なのは、彼が自由民権運動という一個

の行為を否定したとき、その否定は実は運動とともにあつた彼自身の青春の否定だつたことである。そういう亀裂に落ちた透谷にとって、思想も行為ともに無力と見えるような瞬間が確かにあつたはずだ。イエスを思想としてしか理解しない彼が宗教の媚業について酔えなかつたゆえンである。透谷はやがて、傷を弥縫する子守唄に飽きる。傷の内部に、痛みの根源に迫ることなしに、自己の鎮魂歌はもはやありえぬことを悟るのである。そのとき、文学という別な媚業が彼をとらえる。

こうして、透谷はひとりの文芸評論家として、観念や認識によつて現実を変えようと試みるあまりにも無力な革命家として、私たちの前に現われる。その無力を誰よりもよく知つていたのは透谷だつたはずである。

透谷と同時代の批評家には、たとえば文学や美学に精通した理論家である森鷗外がいた。また、時代精神の見取り図を精巧に描きながら、そこに自己の夢想を架橋してみせた徳富蘇峰がいた。あるいはまた、文学の構造や機能についてもっともよく熟練したアルチザン内田魯庵がいた。彼らに比して、死を急ぐ透谷の短い半生はあまりにもみずばらしい。にもかかわらず、透谷の批評がなお鮮烈なゆえんは、人間内面の魔についていい、松島の無についていう透谷の声が、自己の無力の根源に確実に届いていたからにほかならぬ。

念のためにいえば、右のような感傷的な透谷像が、すでに、わたしの貧しい戦争体験からまったく逸脱していたのはいうまでもない。しかも、なお細い糸は切れていなかったようである。

参考文献

坪内逍遙

- 千葉亀雄「坪内逍遙伝」(改造社 昭和九・一二)
 白名民憲編「逍遙」(三越大阪支店 昭和一一・一)
 瀨田貞治編「逍遙書誌」(米山堂 昭和一二・二)
 河竹繁俊・柳田泉「坪内逍遙」(富士房 昭和一四・五)
 坪内士行「坪内逍遙研究」(早稲田大学出版部 昭和二八・九)
 大村弘毅「坪内逍遙」(吉川弘文館 昭和二三・九)
 河竹繁俊「人間坪内逍遙」(新樹社 昭和三四・五)
 本間久雄「坪内逍遙一人とその芸術」(松柏社 昭和三四・六)
 柳田泉「若き坪内逍遙」(春秋社 昭和三五・九)
 「坪内逍遙論」(早稲田文学 大正一五・五)
 「坪内博士追悼号」(早稲田文学 昭和一〇・四)
 「坪内逍遙先生追悼号」(芸術殿 昭和一〇・四、五)
 「坪内博士を偲ぶ」(中央公論 昭和一〇・四)
 「坪内逍遙追悼特輯」(文芸 昭和一〇・四)
 「坪内博士記念号」(英語青年 昭和一〇・五、六)
 「特集・坪内逍遙研究」(明治大正文学研究 昭和三〇・五)

二葉亭四迷

- 坪内逍遙・内田魯庵編「二葉亭四迷」(易風社 明治四二・八)
 内田魯庵「きのふけふ」(博文館 大正五・三)
 内田魯庵「思ひ出す人々」(春秋社 大正一四・六)
 坪内逍遙「柿の帯」(中央公論社 昭和八・七)
 中村光夫「二葉亭論」(中村光夫評論集) 芝書店 昭和一一・一〇
 坂本浩「二葉亭四迷」(子文書房 昭和一六・三)
 内田魯庵著・柳田泉編「明治の作家」(筑摩書房 昭和二六・一〇)
 中村光夫「二葉亭四迷論」(進路社 昭和二二・一〇)
 中村光夫「二葉亭四迷」(河出書房 昭和二八・九)

二葉亭四迷全集編集部編「二葉亭案内」(岩波書店 昭和二九・六)
 中村光夫「二葉亭四迷伝」(講談社 昭和二三・一二)

「二葉亭壮行号」(趣味 明治四一・七)

「長谷川二葉亭氏逝く」(読売新聞 明治四二・五・一五)

「故二葉亭氏追憶録」(新小説 明治四二・六)

「二葉亭研究小特集」(明治文学研究 昭和九・三)

「特輯二葉亭研究」(文学 昭和一二・九)

「二葉亭四迷」(文学 昭和二九・一〇)

北村透谷

- 坂本越郎「北村透谷」(弘文堂書房 昭和一五・八)
 舟橋聖一「北村透谷」(中央公論社 昭和一七・二)
 穴道達「北村透谷」(宝文館 昭和二四・六)
 笹淵友一「北村透谷」(福村書店 昭和二五・七)
 坂本浩「北村透谷」(至文堂 昭和二三・八)
 平岡敏夫「北村透谷研究」(有精堂 昭和四二・六)
 「北村透谷号」(民衆 大正七・五)
 「特輯北村透谷」(明治文学研究 昭和九・四)
 「北村透谷」(文学 昭和一二・二)
 「北村透谷の研究」(明治大正文学研究 昭和二三・六)
 「透谷と藤村」(国文学 昭和三九・六)

次回配本

十一月五日

第59巻 現代名作集(一)

武蔵野(美妙)・かくれんぼ(緑雨)・書記官(眉山)
 今戸心中(柳浪)・初すがた(天外)・団栗他(寅彦)
 野菊の墓(左千夫)・千鳥(三重吉)・解剖室(霜川)
 少年行(星湖)・茗荷畑(青果)・世間師(風葉)・飲
 楽の鬼(秀雄)・修善寺物語(綺堂)・和泉屋染物店
 (李太郎)・零落(幹彦)・木乃伊の口紅(俊子)・鱧
 の皮(小剣)

解説 吉田精一

現代文学大系

第 2 卷

紅葉の「病骨録」

丸 岡 明

昨日は高見順君の葬儀へいった。一昨日の夜は、高見君の通夜が築地の灘万であつたが、たまたま私の昔の中学時代の友達たちが、近く歐洲へゆく私のために、歓送会を兼ねた集りをしてくれてゐたので、その通夜の席へは、終り頃にちよつとだけしか顔を出すことが出来なかつた。

高見君は近代文学館の起工式が行はれるのを、全身に拈つてしまつた痛と戦ひながら待ち受けてゐた観がある。まことに痛ましい話だ。

近代文学館の起工式が、十六日。式は午前中に終つて、それから千葉の病院へ、伊藤整君たちがいつたらしい。無事に式のすんだことを伝へると、それを聞いて昏睡状態に陥つた様子である。

高見君はその翌日の午後五時三十何分かに死去した。私はそのニュースを、タクシーの運転手台からラヂオで知つた。

月 報 30
昭和 40 年 10 月

目 次

紅葉の「病骨録」……………丸岡明	三
紅葉文学のたのしさ……………岡保生	三
「照葉狂言」のモデル……………村松孝雄	三
ある記憶……………三好行雄	三
現代文学事典②……………中岡小説	三

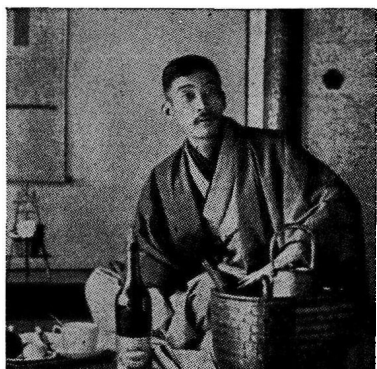
東京都千代田区
神田小川町2の8

筑 摩 書 房

高見君の闘病生活は、一年十ヶ月だつたと云ふから、一昨年十一月のことだつたか癌だと分つて、明日は手術のために入院する前夜、賑やかに皆で飲まうと云ふ電話が、私のところへもかつて来た。私は外出してゐて、遅く家に帰つて来てからそれを聞いたが、また妙なことを考へ出したものだと思つた。しかし今は、その夜、家にゐなかつたことが非常に残念である。

尾崎紅葉の「病骨録」は、前半が、明治三十六年の三月十日から十四日までかかつての自筆。後半はその年の十月一日に、門下生が筆記したものやうだ。紅葉の死は、十月三十日午後十一時十五分。胃癌のためであつた。享年、数へ歳で三十七歳。高見君とは比較にならぬぐらゐ若い。

「病骨録」によると、紅葉は入院の約一年前に胃に異物のあるのを発見して、長与ドクトルの診断を受けてゐる。胃癌かも知れぬと云ふ自覚は、既にその時からあつたやうだ。紅葉はそのために、「……懼れも感おぼひもして、寝ぬ夜の思を累かさねた事も有つた」と記す。しかしその後、「ま生も弛み、所に寒氣が来て、病勢の傾に増した為に、入沢博士の再診を経て、病症を判定する目的を以て」入院したのであつた。



明治36年、退院後の紅葉

日記の最初に記されてゐる三月十日、多くの見舞客が帰つた後で、「食前卅分に用る散薬を服して、直に晚餐の膳立を始めた。」

ミルク一合を土鍋であたため、その土鍋で三箇の卵を半熟にするのである。その一方で、パンを截

り、それをバタ・トオストにするのが、病院生活の晩餐だつた。

「ミルクの煮え立つ折から、看護婦が来て、長沢氏の回診があると告げて、直に四下の狼藉を形附るので、予も食事を中止して待つほどに、学士は入来つた。」胸や背の打診聴診があつて、常のやうに診察後の無駄話を始め、その医師は、「氏は此病に就いて如何に自身に考へて居るやと問は」れた。

それが、その長沢学士の病症宣告の仕方だつたのである。検査の結果の次第によつては、ただちに手術をしなければならぬが、その覚悟をするやうにと云ふほどの宣告だが、当時はそれが、直接死につながる宣告であつた。

病名はなほ検査中だからと云つて、告げてはゐないが、紅葉はそれで胃癌であることを申し渡されたやうなものだつた。お

そらく医師たちには、とうに胃癌であると分つてゐただらうし、門下生たちもそれを承知させられてゐたかと思ふ。

紅葉は長沢学士が病室を去つた後、まづい晚餐を終へて、それから睡眠のための葡萄酒を買ひに、本郷通りへ出てゆくのである。

死に直面してこの日記は、紅葉が苦心をして自己のものとした文章があつて、初めてその心理が、過不足なく描写されてゐるらしく見える。また紅葉の日頃の心理の動きが、紅葉の文体をつくつたかとも考へることが出来る。日記の前編の退院の日に、紅葉は入沢博士の口から、胃癌であると初めて病名を告げられたものらしい。あからさまに、さうとは書いてゐないが——そのやうに感じ取れるやうに書くことが、紅葉の散文精神だつたとも云へようか。

『七月十三日／時間意識の喪失と言ふと大げさだが、いやな氣持。——／眼がさめて時計を見ると三時十分。／えゝと、いつの三時？／部屋がうすぐらくしてあるので、昼か夜か分らぬ。／それにこの頃よく夜中の三時に眼がさめる……。』(以下略)

これは高見君が書きとめた日記の最後のものだ。新聞に報道されてゐたのを、うつし取つてみた。紅葉の「病骨録」もその写真版によると、文章の推敲の跡があるが、高見君の中型横筆のノート・ブックに書いてあつたと云ふこの日記にも、文字や言葉の訂正がある。

死の直前にゐて、なほ文章を整へる氣力を、立派なものだと感じ入つた。

紅葉文学のたのしさ

岡 保 生

内田魯庵は『思ひ出す人々』（大正十四年六月刊）のなかで、紅葉がつねに外国文学を読んでいたことを回想し、紅葉の小説には外国小説からヒントを得たものやいわゆる換骨奪胎したもののが少なくないと述べている。さらに魯庵はつづけて「紅葉は決して外国小説が嫌ひではなかつた。」と断言している。

これは間違ひではあるまい。実際紅葉晩年の日記『十千万堂日録』を見ると、紅葉は明治三十六年十月に没したが、そのわずか三か月まえの七月でも、病気がかなり重症だったのに、一日にはオストロフスキイの戯曲『ストオム』（英訳、以下同じ）、四日にはメテリンクの戯曲集、五日にはダヌンチオの『死の勝利』といった調子で、ほとんど毎日外国文学を読みつづけている。残念なことに紅葉の日記は、今日のところ明治三十四年一月以後の分しか遺っていないので、その以前ははっきりしないが、たぶん魯庵のいうとおりだったろう。

なぜかという、紅葉は出世作『二人比丘尼色懺悔』（明治二十二年）以来、おもな作品だけをひろってみても、『おぼろ舟』『伽羅枕』『むき玉子』『二人女房』『紅白毒饅頭』『三人妻』『男ごころ』『心の闇』『不言不語』『多情多恨』そして『金色夜叉』というように、一作ごとにそれぞれ題材を変え、趣向を新しくして、たえず自身の創作活動における新境地を開拓しよう

と心がけているのだが、このためには外国文学の吸収ということはおそらく必至だったであろうと推測されるからである。

紅葉が没してからすでに六十年以上の歳月を経ている。明治は遠くなりにけりということから、ややもすれば紅葉は古くさい作家のように考えられがちだ。しかも、紅葉は封建的な戯作的な作家だったのだという先入観が一般にしみついているようだ。無論、私もその見解をまったく否定するわけではない。だが、現在ではそうした一方的な見方が行き過ぎているように思う。紅葉はあの当時、むしろたえず新しさを求めて止まぬ作家だったのだ。

そこで、紅葉と外国文学との関連ということになると、従来すでに指摘された、『夏小袖』とモリエールの『守銭奴』というような翻案もの以外に、いろいろな作品にさまざまな形式での西欧文学の投影が見られると、私は思う。たとえば『心の闇』（明治二十六年）の主人公佐の市が心ひそかに思っていたお久米の結婚話を聞いて落胆するところ、普通なら「掌中の珠を奪われたように悲しんだ。」とでも書くだろうが、紅葉は「譬へば吝嗇者の金銀貨を椽の下に土深く埋めおきて、人には言はず語らず、其上の疊に寝腹這ひて、銭無き顔はすれど、土中に何百円と、取出しては見ねど心に楽しく、これぞ命から二番目と恃める宝。その後掘起せば、瓶はあれども実は虚（うそ）になりたる、その驚駭と、失望と、悲歎と、憤恨もなか／＼逮（た）ぶべくもあらざるは、佐の市が心の中なり。」と書いている。このたとえからだれでもすぐジョージ・エリオットの『サイラス・マナー』（一八六一年）の主人公を思い出すだろう。床下に穴を

掘り、その中へ金銀貨のはいた鉄の壺を入れておき、毎夜取り出しては金貨の感触を楽しんでいたあのマアナー、彼が金を奪われたときの驚愕と悲嘆ぶりはご存じのとおりである。紅葉がはたしてこの作を読んでいたかどうかは確証がないが、この作がひろく読まれていただけに、英語のできた紅葉は当然読んでいたであろうと推測されるのである。

紅葉の小説を読んでいると、こういう発見の喜びをしばしば味わう。かくしてぼくはきょうも本棚からずっしりと持ちこたえのある『紅葉全集』を引っぱり出すのである。

(昭和女子大学講師)

「紅葉狂言」のモデル

湯浅しげ女のこと――

村松定孝

春陽堂版の「明治大正文学全集」の第十二巻は「泉鏡花篇」である。巻尾に「小解」という頁があり、署名は草紙樓となっている。が、勿論これは鏡花で、そのことは目次に明示されている。その「紅葉狂言」の項に「ふるさとの木槿（カキ）の露。小親の楽屋は今もなつかし。」とするされているのは、本作の風景描写が鏡花幼少の頃に過した故郷金沢の日々の記憶に基づくものであることを裏書きしているといえるだろう。母なき貢を哀れんで優しくいたわる隣家広岡の娘お雪と貢とが一重の木槿垣をへだててまみえるとき、「朝霧淡くひとつ／＼に露もちて、

薄紫に薬青く、あはれに咲重なる」木槿の香りただようのは、少年の日の感覚の再現であり、その情景の一つひとつは、貢の眼をとおして、作者が回想の中の自己のイメージをたしかめているようにも思われる。

「小親の楽屋」とは、貢に配する作中の小親のそれを指しながらも、同時に「今もなつかし」の語のある以上、実在の小親に通わした表現とみるべきではあるまいか。金沢の殿田良作氏の調査に拠ると、今様能狂言の元祖に林寿三郎という人がいて、その人の墓は金沢市野田寺町極楽寺にあり、墓の側面に寿三郎一門の役者の名が列ねて記されているそうである。殿田氏は、その連中のなかに林小親の名のあることを指摘した上で、「かなり古い番組にもその名が見えるので、小説は事実を伝えるものかも知れない」と推定されていられる。いずれにしても、鏡花が小親なる女役者の出演した紅葉狂言を見物したであろうことは想像に難くない。但し、鏡花の「紅葉狂言」に出てくる小親に相似した人物が――あのような運命を持った――実在したか否かは疑問である。

そこへゆくと広岡の姉上なるお雪のモデルは殿田氏も「泉鏡



像夫人耶麻の信仰した鏡花

花の生いたちと『紅葉狂言』(昭三六・三「あらうみ」)で述べられているように、金沢の尾張町で、時計商をしていた湯浅善二郎の妹しげに相逢するまい。しげ女は晩

年、父のあとを継いでやはり時計店を営んでいた甥の湯浅莊二氏の家で起居していた。店は尾張町、住居のほうは玄蕃町三ッ巡りにあった。私はいまから二十五年前の昭和十五年の秋、卒業論文に鏡花を選んだ関係で金沢に赴いた際、当時の市立図書館長の毎田周次郎氏の紹介で、玄蕃町に、しげ女を訪ねた。

しげ女は既に七十歳であったが、若かりし日は、さぞやと思われるような品よい細おもての嫗であった。

彼女は、ぼつりぼつりと幼なき日の思い出を聞かせて呉れた。

「わたしは、鏡ちゃんとは二ツちがいの姉さんがわけてござりました。ハイ、小まい頃から無口な瘦せぎすなお子でした。

わたしとは大の仲よしで毎日のように遊びに行ったり来たり、鏡ちゃんのお父ッあん（泉政光）にかんざしをこさえて貰うて、よろこんで髪に差したりしたものでござります。このお父ッあんという人が大のお天気やさまで、気がむかにゃあ、いくら催促されても仕事をようせんがや。なんでも手間料は他の銚屋（細工職人）の三層倍がとこは取りましたそうで。鏡ちゃん

は、おッ母さんが逝かれてからは、えろう淋しがりやになられござって。英和学校（北陸英和学校、現在の北陸学院高校）へ上ってからは英語をおぼえるのが上手で、家の兄さんなどにも時

時学校で教えてもううた孫伝授をしとりました。紅葉さんのお弟子なるいうて東京へ参りましてからは、あまり家へも音沙汰

がなうて、わたしなんども鏡ちゃんがよもやあんなおえらい小説家になろうとは思わなんです。それから、わたしも

他家へまいましたりして……」

しげ女の昔語りは、まだまだ続いたのであったが、それを聞いていて、私は彼女の上に「照葉狂言」のお雪よりも、むしろ「一之巻」——「誓之巻」のお秀を聯想した。しかし、お雪の不幸な結婚は、しげ女の場合にも当てはまる。彼女は十八歳で金沢市内彦三一番丁の藤谷外茂氏に嫁したが、まもなく不縁となり、以後は湯浅家で兄や甥の世話になって過す身となったのであった。妻の座を去ってのちのしげ女には、東京の鏡花から幼な馴染みをなつかしむ書状が届いている。私が同家で見せていただいたのは大正五年六月二十日の日付のものであったが、四十四歳の鏡花の文面は、うぶな青年の恥じらいの恋文を思わせるものがあつた。

たとえば近況をしるしたあとに、「あまりたあいなき事に候まゝ御令兄にはわざと御遠慮いたし御許にまで申しまゐらせ候よしそれにても御煩はしき段は御優しき御許さまおきにゆるし下され度またみ心のむき候みぎり候ひなば一寸のおん気まぎれに今日は雨とも快晴ともだけおたより御聞かせ下され度尚ほまことに申しすぎのやうに候へども唯おん名ばかり御みづからおんしるさせのほどひとへに念じ入り申候」と書かれていて微笑のわくものがあつた。

ちなみに、お雪が楓かえでの木の色紙を結びつけ貢をよろこばす簡処があるが、鏡花の父に宛てた書簡にも故郷の家の楓をなつかしむ一条があり、小説のしめくくりにも「姉上が楓のために陥りたまひしと聞く、其境遇に報ひ参らす。」となつてゐる。或いは、この楓への郷愁があの豊かなるロマンの源泉となつたのかもしれない。

「照葉狂言」は、もとより鏡花の自叙伝ではない。だが、若き母を喪った彼の幼年時代の感傷と、その涙にうるむ眼もて眺めた金沢の風物と、当時彼をいつくしんでくれた女性の面影とがそこに反映していないとは、何人も断言することはできないであらう。

(昭和女子大学助教授)

ある記憶

三 好 行 雄

鏡花をやみくもに耽読していた時期がある。中学の終りから旧制高校にかけての頃で、高校を卒業したのが敗戦の年にあたるから、ちょうど太平洋戦争の時期とかさなっている。なにおもしろくてあかも鏡花に熱中していたのか、とにかくニーチェや西田哲学にかじりついている友人たちを横目ににらんで、内心はいささか気恥しい思いで鏡花全集を読みあさっていた。

むろん、文学研究といえども私的な体験からはなにごともはじまらない。体験の普遍化などとは妄想にすぎぬと信じているので、これ以上当時の心情をほじくってみてもどうにもならぬのは分っているが、しかし鏡花についてなにか考えようとする、いつもそのみみっちい記憶にふりもどされる。その記憶は鷗外流にえばへ微かなレミニスサンスとして、心情の底にひそむのである。わたしにとって、鏡花はどうやらブランドンのいわゆる「心情の避難所」であつたらしい。

そこで、私的な体験になおこだわるのを許してほしいが、敗戦後、戦後文学の眩暈とともに鏡花への関心がややうすれはじめたころ、わたしがふたたび鏡花と対面したのは新派の舞台上によってであった。

不遜ないいかたと聞えるかも知れぬが、新派の鏡花は、せもの、だ、というのが最初のいつわらぬ感想であつた。たとえば、現前で演じられる喜多村緑郎のお蔭がもはや演技をもつては所詮おおいえぬほど年老いているという事実、そして、そのお蔭がわたしの心象のなかにある可憐で純情な女性とは似ても似つかぬという事実とは、それは無関係であつた(ついでにいっておきたいが、素朴な観客としては、俳優諸氏はつねにたとえば音楽家における音、小説家における言語とおなじ原理で、自己の肉体を表現の媒体にしているという事実を忘れてはしくくないと思う)。

こういう舞台のみかたにはひとつの鉄則があるらしい。つまり喜多村の演ずるお蔭を観るのではなく、お蔭を演じる喜多村を観るという謙虚な、が不毛な観客の自己麻酔。しかし、そうした麻酔をほどこしてみても、新派の舞台はなお鏡花の世界から多くのものを切りおとして、新派の演じる世界自体が、わたしにはにせものだと思えたのである。

ことわっておくが、だから、新派の舞台がどうだというわけ



「通夜物語」の稽古にて、
左から花柳章太郎、鏡花